

## 法円坂倉庫群の再検討

積山 洋

### はじめに

1987年、大阪市の難波宮跡で発見された法円坂倉庫群は、古墳時代中期に上町台地北端の高台に建設された倭王権の拠点的クラとして知られるようになった。発見されて30年以上たち、一棟の規模ではより大きなクラは見つかったものの、総床面積（約1,440㎡）では、今でも突出して最大規模であることに変わりはない [南 2013]。

倉庫群の北方は淀川（現大川）の河口に近く、難波津の水運との密接な関係も想定された。当時、難波津は住吉津より新しく6世紀になってからの開発・整備とするのが古代史の通説であったが、倉庫群の発見はその見直しをも迫るものであった。

発掘調査では、東群6棟、西群10棟の倉庫がそれぞれ二列、整然と並んで検出され、その方位は西群でほぼ真東西、東群でも誤差2度以内の新東西と、正方位の建築であることが判明した（図1）。建物の規模は平均床面積約90㎡（桁行10m・梁行9m）で、総柱構造であり、屋根は入母屋造りで高床建築と復原されている。

そのうちの1棟が竪穴建物と重複し、かつそれに先行することが確認された。この竪穴建物から廃絶後の土器が多数出土したが、床面及び北面の竈から出土した須恵器から、竪穴の使用年代はTK23～47型式のころと考えられ、これより古い倉庫群の年代は5世紀後半と評価されることとなった [大文協 1992・南 1992]。

このような年代観は、当時、須恵器生産の開始が5世紀中ごろとする説 [田辺 1981] が主流だったからである。筆者は須恵器の登場を5世紀前半でも中葉に近いころと想定し、初期須恵器の出土を根拠として、倉庫群の建設年代を中村編年I型式2～3段階 [中村 1978] と考えたことがあった [積山 1990] が、その場合でも、ほぼ報告書と同様の年代観となった。

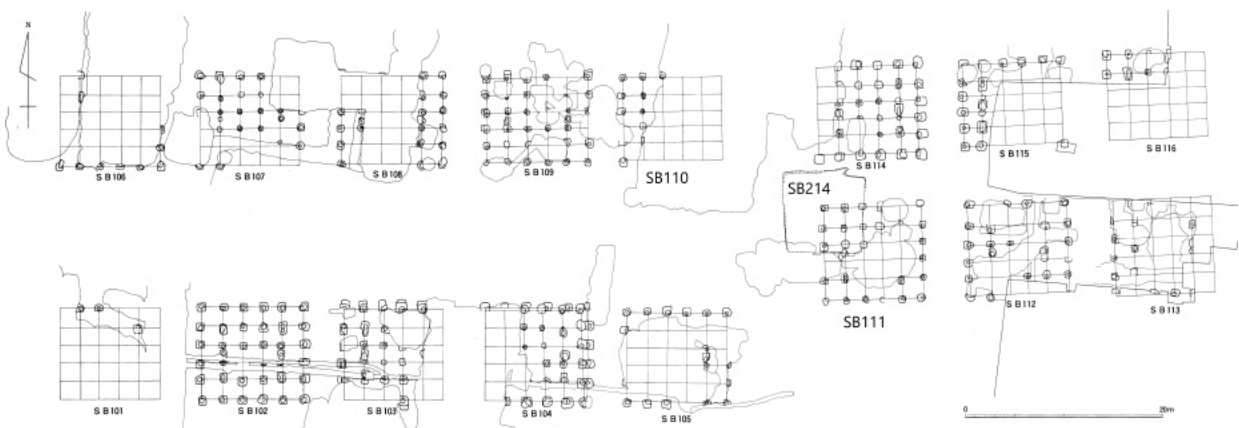


図1 法円坂倉庫群実測図

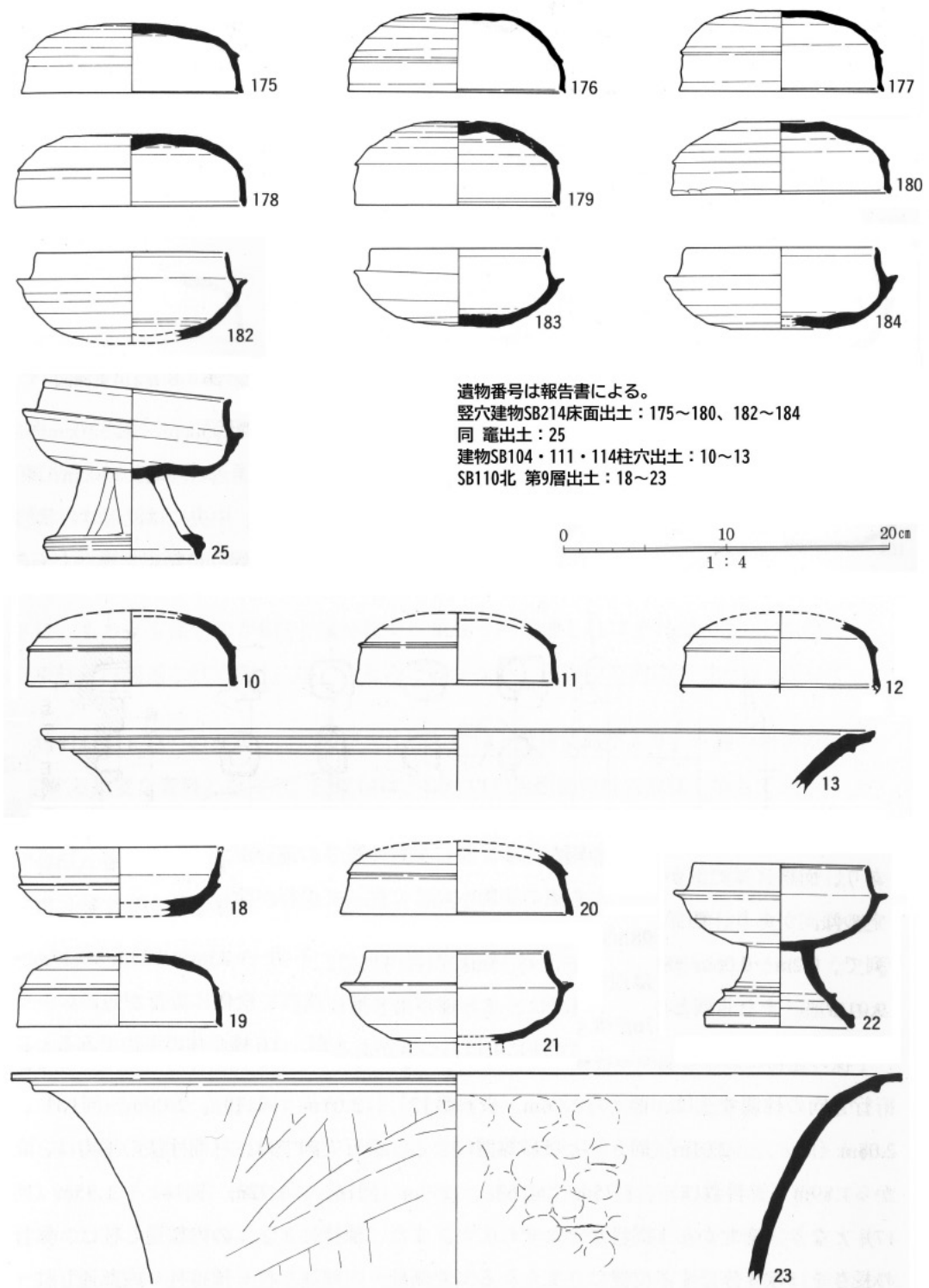


図2 法円坂倉庫群出土須恵器

しかしその後、陶邑窯で最古とされた TK73 型式を遡る窯跡が相次いで発見され、いまや須恵器の登場年代がかなり遡るとする見方が主流になりつつある。そうした気運の中で、法円坂倉庫群の年代の見直しも始まっている [南 2014]。それによれば、倉庫群の下限（廃絶）は田辺編年の TK23～TK47 型式より古く、上限（建設）は TK216～TK208 型式の間であり、「建物群の存続時期は 5 世紀第 2 四半期から 5 世紀後半」とされている。須恵器の新しい年代観にもとづき、法円坂倉庫群の年代を再検討し、それから派生するいくつかの問題にふれるのが本稿の目的である。

### 1. 法円坂倉庫群の相対年代

ここでは、あらためて年代を考える基礎資料となる土器（図 2）を検討する。

#### (1) 堅穴建物 SB214 出土の土器

SB214 は倉庫群東群の建物 SB111 との重複関係では SB111 より新しいので、この堅穴から出土した須恵器が倉庫群の年代の下限となる。幸運なことに、ここから出土した土器は豊富であったが、古墳時代後期のものが圧倒的に多く、床面近くで出土した土器は限られ、そこにも後期の土器などを含んでいた。それらを除いて蓋杯類を図示したのが 175～180、182～184 である。

まず蓋では、天井が低く平らな 175・178・180 と、天井が高く丸みを帯びた 176・177・179 に大別することができる。このプロポーシオンの差は新古の型式差を示す可能性があり、前者が古相、後者が新相であるかにみられる。外面ヘラ削りの範囲も後者が狭い傾向にある。杯身は、いずれも深手の器形で、蓋で見た新相の器形と対応する。183 のようにやや小型化の傾向もみられる。これらの須恵器は TK208 型式までは遡らず、MT15 型式までは降らないであろう。したがって蓋に見る新旧の様相を勘案すると、TK23～TK47 型式であるとみるのが妥当であろう。

25 の須恵器高杯は SB214 の北面竈で検出された。竈の壁体を支える支柱となっていた粘土の芯に天地逆転して据えられていた土器であり、堅穴が居住に供されていた時点を直接示す資料である。脚部は三方スカシであり、杯部のプロポーシオンは、床面出土の杯身より浅めであり、蓋の古相に対応する可能性がある。一点だけなので断言はできないが、この高杯が TK23 型式に属する可能性を考えておきたい。

以上から、堅穴建物 SB214 の存続期間は TK23 型式及び TK47 型式のころとみられる。報告書で述べられた結論と同じである。

#### (2) 倉庫群柱穴出土の土器

次いで、倉庫群の建物本体の柱穴から出土した土器を検討する。これらはいずれも柱の抜取穴から出土している。10～12 の須恵器杯蓋は、SB214 床面の蓋の古相と同様のプロポーシオンであるが、11 は天井部と口縁部の境の稜線が鋭く、形式的に遡る可能性がある。甕 13 は口縁部の残りが悪く、口径には不安があるが、端部を外上方につまみあげるようなつくりは定型化以後の上下に肥厚させた端部とは異なる。陶邑 TK87 号窯（TK73 型式）に、同じではないが類似する出土例がある（図 3）。このほかに、内面の青海波をスリケシした甕の体部破片が 2 点、また土師器の椀型高杯と甗が各 1 点出土している。

これらの土器にも、新古の二相がみられ、新相の杯蓋 10・12 は倉庫群の廃絶時期を示す可能性が高い。それは TK208 ～ TK23 型式のころとみられる。古相の 11・13 や内面スリケシの須恵器甕などは、倉庫群の建設から存続期間中の土器とみられる。これらは初期須恵器の後半段階か、降っても TK208 型式のころと見受けられる。

### (3) 第 9 層出土の土器

調査地内でわずかに残っていた最も古い地層が第 9 層であり、倉庫群中の西群北列に位置する SB110 の北側で検出された。いずれも須恵器である。18～20 は杯蓋と報告されたが、報文にもあるとおり 18 は異なる器種の可能性がある。蓋にしては天井部がかなり厚いからである。ここでは 18 の天地を逆転して図示してみた。こうすると、無蓋高杯の杯部である可能性が考えられる。この時期に小型の杯部を有する高杯は珍しいが、類例 (図 4) は大和のウワナベ古墳で出土している [清喜・加藤 2019]。ウワナベ古墳では以前から須恵器が出土し、ON46 号窯タイプ (TK208 型式前半) を下限とする初期須恵器であると評価されている [田辺 1981]。19・20 はいずれも稜線は細く鋭い。ヘラ削りの範囲も広い。20 のように天井部が低平で口縁部下端が外側に張出すプロポーシオンは TK216 型式で散見される。21・22 は高杯で、21 は口縁部が内傾し、下膨れのプロポーシオンであり、報告書では杯底部の痕跡から四方透かしの可能性が指摘されている。四方透かしの盛行期は TK216 ～ TK208 型式である。22 は、脚部の下部に突線がつく。高杯はいずれも初期須恵器でも後半の特徴を有している。甕 23 は口縁端部の断面形を方形につくっており、その下に鋭い突線がつく。類例 (図 5) は陶邑 TK85 号窯 (TK73 型式) [大阪府教委 1978] などで出土している。第 9 層の土器は、前項と同じく初期須恵器の後半から TK208 型式までの範囲に収まるとみられる。年代的に倉庫群以外に関係づけうる他の遺構がないことから、その存続期間に関わる可能性が高い。

### (4) 小結

倉庫群より新しい竪穴建物 SB214 は、TK47 型式のころに廃絶するが、その使用期間が TK23 型式に遡る可能性がみられた。倉庫群の柱穴から出土した土器から、法円坂倉庫群は TK23 型式の頃に廃絶したとみられる。その建設は遅くとも TK208 型式であり、初期須恵器の後半、TK216 型式か ON46 段階に遡る可能性がある。以上も報告書の所見と一致する。

それでは、その実年代はいつごろになるのであろうか。以下ではその点を検討したい。

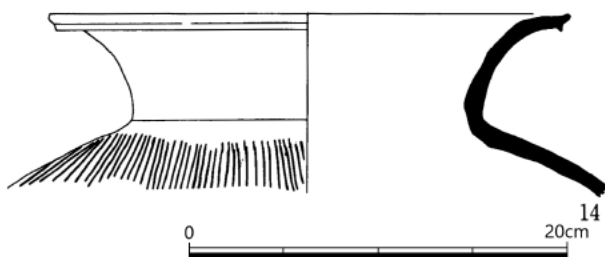


図 3 TK87 号窯出土須恵器

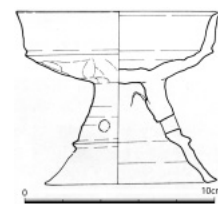


図 4 ウワナベ古墳出土須恵器

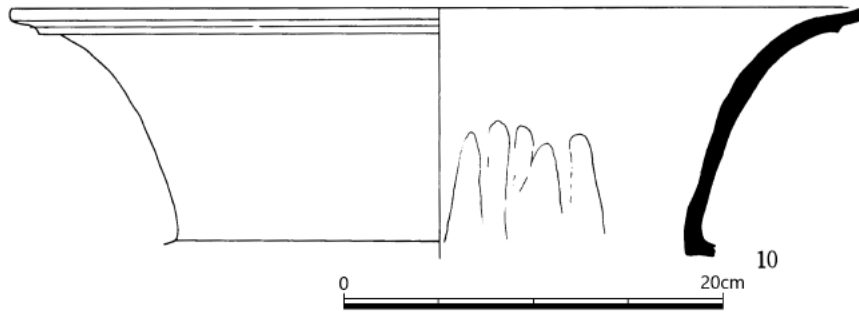


図5 TK85号窯出土須恵器

## 2. 須恵器の年代観と法円坂倉庫群

近年、大きな研究課題になっているのが、須恵器の実年代である。既述したように、かつてTK73型式を5世紀中ごろとする説が主流であった。これに対し、須恵器生産の始まりが4世紀末～5世紀初頭〔白石1985〕、西暦400年ごろ～5世紀前葉〔都出1982〕などとする説もあった。その後、陶邑窯でTK73型式を遡る窯跡の発見が続き、また年輪年代学の進展と相俟って須恵器の登場が5世紀中ごろを遡ることは、ほぼ確実にされている。ここでその成果を整理すると、以下のごとくである。

1980年代後半から陶邑窯において、TG231・232号窯が発見され、また2007年にはON231号窯の発見があった。これらはいずれもTK73型式を遡るものとみられ、TG232型式と認定されている。一方で、平城宮下層の流路SD6030出土の須恵器礎はTK73型式とされ、伴出した木製品はヒノキ製で、樹皮直下まで年輪が完存していたことから、412年の伐採であることが判明した〔光谷・次山1999〕。この木製品は平面形が不整六角形で両サイドに突起がある特異な形状（厚さ6.8cm）により、盤などの未製品ではないかとされている。

2004年度の宇治市街遺跡の調査でも、流路跡から大量の土師器とともにTG232型式の須恵器が出土し、これに伴出した木材の伐採が389年と判明した〔光谷2007〕。この木製品も「杓子状板材」と呼ばれる未製品で、辺材が完存していたが、年輪数が少なかったため、炭素14ウィグルマッチング法との照合により、上述の年代が確定したものである。

このような成果が出た結果、TG232型式が4世紀末、TK73型式が5世紀初頭との見方が広がりつつある〔大阪狭山池博2019〕。確かにTG232からTK73への型式変化とこの年代観は整合的である。またいずれの木製品も未製品であるなら、伐採後、あまり時間を経ずに流路に埋まった可能性があるだろう。

とはいえ、伐採後、どれほどの時間を経てそれぞれの木材が未製品の状態に加工されたのか、またその後自然流路に埋まるまで、どれほどの時間を要したのかという点は、やはり不明であることも留意する必要があるだろう。その点を考慮し、私としてはTG232型式の年代は4世紀末～5世紀初頭ごろ、TK73型式は5世紀第1四半期ぐらいの範囲で捉えておくのが妥当と考える。

一方、TK47 型式については、埼玉稲荷山古墳の須恵器がポイントになる。鉄剣に刻まれた「辛亥年」は通説では 471 年であり、「獲加多支鹵大王」が『日本書紀』の「大泊瀬幼武（オオハツセノワカタケル）天皇」、つまり雄略であることはほぼ認められている。それは、雄略とされる倭王武の中国南朝・宋への遣使が 478 年であるのと整合的である。この古墳の墳丘出土の一群の須恵器は墓前祭祀の土器であろうから、471 年を遡らない。須恵器は TK47 型式の古い段階に位置付けられている [田辺 1981] が、この型式はほぼ 5 世紀第 4 四半期ごろとみることができる。そうすると、TK23 型式は 5 世紀第 3～第 4 四半期ごろかと思われる。

以上により、TK23 型式を年代の下限とし、初期須恵器後半（TK216 型式～ ON46 段階）を上限とする法円坂倉庫群は、5 世紀前半（第 2 四半期）に建設され、その後半（第 3～第 4 四半期）に廃絶したと考えておきたい。

### 3. 大王墓の変遷と法円坂倉庫群

ここでは法円坂倉庫群の造営主体に迫ってみたい。

中期古墳に限って大王墓の変遷を概観すると、津堂城山（墳長 208 m、以下同じ）→仲津山（290 m）→上石津ミサンザイ（360 m、宮内庁治定では履中陵、以下同じ）→誉田御廟山（425 m、応神陵）→大山（486 m、仁徳陵）→土師ニサンザイ（300 m）・市野山（230 m、允恭陵）→岡ミサンザイ（242 m、仲哀陵）の順であることは、大方の一致するところであろう。いずれも百舌鳥・古市古墳群の大王墓である。

津堂城山古墳は巴形銅器や石製碗飾類という古い要素を持ちつつも、典型的な長持形石棺、三角板皮綴武具（単甲または冑）、整った盾形の二重周濠を有し、中期古墳の嚆矢に位置付けられている。円筒埴輪はⅢ期 1 段階<sup>1</sup>である。仲津山古墳と上石津ミサンザイ古墳はいずれも円筒埴輪がⅢ期 2 段階であるが、後者は外側周濠が陪冢の寺山南山古墳（方墳）の南西周濠ともなっており、寺山南山ではわずかながら、窖窯焼成の円筒埴輪があり、B 種ヨコハケの技法も仲津山の方が古いこと [永井 2018]、寺山南の墳丘から TG232 型式の須恵器が出土している [植野 2008] ことなどから、

仲津山より後出するとみられている。上石津ミサンザイの埴輪は有黒斑（野焼き）であるが、その外周整備（完成間近）から間もないころ、須恵器が登場していたようである [十河 2013]。

古市古墳群でも大王墓に次ぐ規模の墓山古墳（225 m）とその陪冢の西墓山古墳で有黒斑（野焼き）と無黒斑（窖窯焼成）の埴輪が共存しているので、須恵器生産の開始に連動する埴輪の窖窯焼成はこのころを起点とするようである。

次の誉田御廟山古墳で、無黒斑の円筒埴輪が盛行するとともに、その器面調整に Bc 種ヨコハケが登

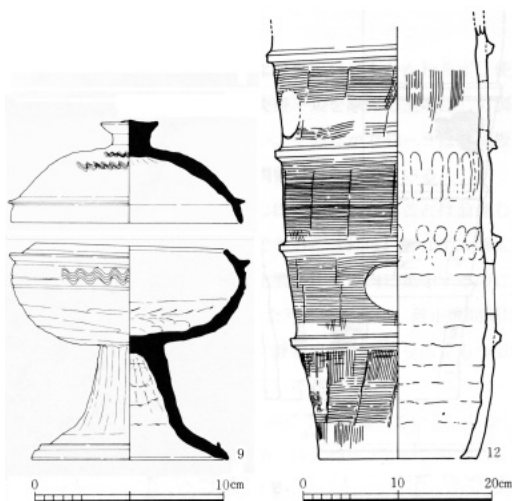


図6 堂山 1 号墳出土の須恵器と円筒埴輪

場する。このヨコハケ技法は円筒埴輪の突帯間隔と同じ幅の工具を器壁に垂直に当て、静止を繰り返しつつ一回の動作で器面を一周するもので、B種ヨコハケの完成形ともいえるが、Ba・Bb種ヨコハケも混在する。この埴輪はⅣ期1段階に位置付けられている。Bc種ヨコハケの円筒埴輪は北河内の堂山1号墳でTK73型式の須恵器と共存している[大阪府教委1994](図6)ので、遅くともその頃には誉田御廟山の築造が始まっていたであろう[小浜2006]<sup>2</sup>。埴輪の器面調整が、Bc種ヨコハケが中心となるⅣ期2段階になるのは大山古墳になってからである。ここでは墳丘造り出しから須恵器大甕が出土して

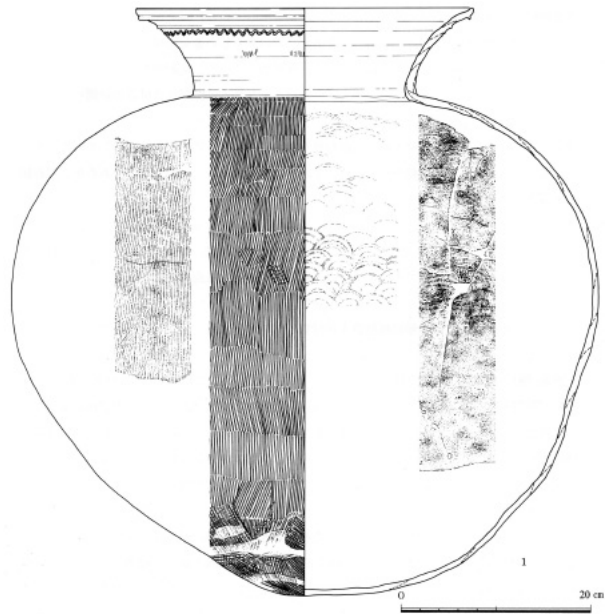


図7 大山古墳出土須恵器

いる[徳田・清喜2001](図7)。この甕は内面の青海波を下半はスリケシ、上半は半スリケシしたもので、ON46段階と評価されている[植野2008]。

土師ニサンザイ古墳になると、円筒埴輪はBd種ヨコハケ(突帯間隔より幅が広いハケを斜めに器面にあてて回転させる)が増加するⅣ期3段階となり、また後期古墳に続いていく墳丘規模の縮小化が始まる。出土した須恵器には新しいものもあるが、口縁部が屈曲して大きく開く甕や内面スリケシ・半スリケシの甕(図8)などがあり[堺市教委1978・2018]、TK208型式ごろとみられる。

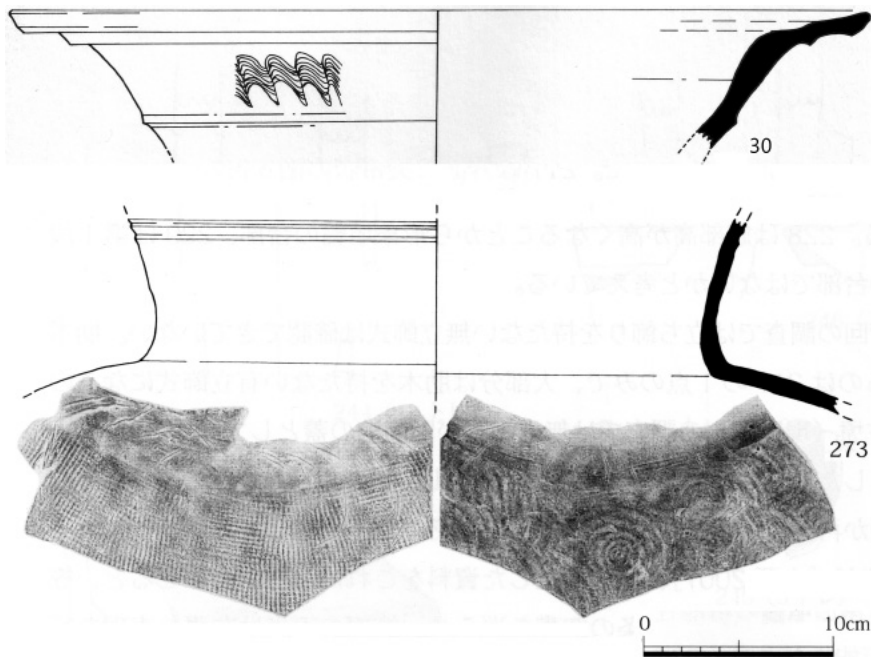


図8 土師ニサンザイ古墳出土須恵器

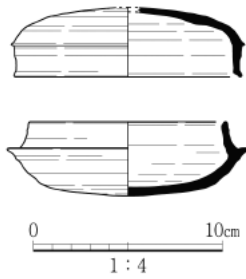


図9 市野山古墳出土  
須恵器

市野山古墳も同じ埴輪であり、前方部外堤からやはり TK208 型式の須恵器蓋杯 (図9) が出土している [大阪府教委 1981]。両者の前後関係は確定できないが、墳丘の縮小という流れからみると、市野山が土師ニサンザイに後続するのかもしれない。

円筒埴輪の外面に2次調整が省略され、1次調整のタテハケのみのものが主流になるV期に入って、岡ミサンザイ古墳が造営された。百舌鳥・古市で前方後円墳の築造はその後も続くが、大王墓の系譜はここまでである。

さて、このような大王墓の変遷からみると、法円坂倉庫群の建設 (初期須恵器後半～TK208 型式) はどの大王墓と併行するのであろうか。須恵器の窖窯焼成が本格的に埴輪生産に導入された誉田御廟山古墳以後ではあろうが、ON46 段階の須恵器が出土した大山古墳が最も有力な候補であろう。だが、問題の須恵器大甕は造り出しで出土しており、墓前祭祀に供されたのであろうが、被葬者の埋葬時点なのか、それとも埋葬後なのかは不明であり、単純ではないことにも留意すべきであろう。

それでは、廃絶時点にもっとも近いのはどの大王墓であろうか。円筒埴輪のB種ヨコハケが省略されるのは小型の古墳では早くから見られるが、大王墓ではV期からであり、須恵器との関係ではTK23 型式からとされている [川西 1978]。これにしたがえば、岡ミサンザイ古墳が有力候補となるだろう。

あくまでも可能性の範囲を出ないものの、法円坂倉庫群は大山古墳の被葬者によって建設され、岡ミサンザイ古墳の被葬者が廃絶させたとの見通しを提示しておきたい。両者の間には土師ニサンザイ古墳、市野山古墳という大王墓が位置付けられており、計四代にわたる大王がこの倉庫群を建設し、継承したのであろう。

#### 4. 倭の五王と法円坂倉庫群

歴史上、実在した5世紀の倭王としては、中国史書に記された倭の五王がよく知られている。最後になるが、法円坂倉庫群がどの倭王と関係するのか、検討してみたい。

まず、『宋書』より朝貢の年次にしたがって倭王の名と王位継承の記事をあげる<sup>3</sup>。

永初2年 (421)・元嘉2年 (425)：讚 (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

年次不明：讚死す、弟珍立ち、使いを遣わして貢献す (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

元嘉7年 (430)：不明 (本紀 5 / 文帝)

元嘉15年 (438)：珍 (本紀 5 / 文帝)

元嘉20年 (443)・28年 (451)：済 (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

年次不明：済死す、世子興、使いを遣わして貢献す (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

大明4年 (460)：不明 (本紀 6 / 孝武帝)



大明 6 年 (462) : 興 (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

年次不明 : 興死す、弟武立つ (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

昇明元年 (477) : 不明 (本紀 10 / 順帝)

昇明 2 年 (478) : 武 (列伝 57 夷蛮 / 倭国)

さて、この諸大王の遣使は、讃が 421・425 年、珍が 438 年、済が 443・451 年、興が 462 年であり、武は 478 年であるが、477 年の遣使も武による可能性が高いであろう<sup>4</sup>。なお、その他の記事には倭王の名が記されていない。

この中から、5 世紀第 2 四半期に法円坂倉庫群を建設した倭王を想定するならば、珍が有力であり、珍の 5 年後に遣使した済もそれに続く候補であろう。またこの倉庫群を廃絶させたのは興か、または武であろう。どちらかといえば、471 年には在位していたワカタケル大王つまり武ではないかと思われる。

### 終わりに

本稿で述べたことを要約すると以下のごとくである。

法円坂倉庫群の建設は、初期須恵器の後半、TK216 型式以後、遅くとも TK208 型式のころまでであり、その廃絶は TK23 型式のころとみられる。倭国における須恵器生産の始まり (TG232 型式) を 4 世紀末～5 世紀初頭と考えると、倉庫群の建設は 5 世紀第 2 四半期であり、廃絶は 5 世紀第 3～第 4 四半期とみられる。

建設の年代に相応しい大王墓は大山古墳であり、廃絶に関係する大王墓は岡ミサンザイ古墳ではないかと推測する。また、倉庫群を建設した倭の五王は、珍であり、廃絶に関係した倭王は武ではないかと推測するが、断定は難しく、それぞれ第 2 候補も考えておかねばならないことも述べた。

以上であるが、今後、須恵器の実年代論に確かな新資料が登場するようなことがあれば、本稿は修正の必要が生じるかもしれないことに留意して擱筆したい。

### 註

<sup>1</sup> 埴輪の編年は [埴輪検討会 2003] の共通編年による。

<sup>2</sup> ただし、小浜が応神を實在性が高い人物と考え、しかも宮内庁が応神陵と治定する誉田御廟山古墳の被葬者であるとする見方には賛成できない。

<sup>3</sup> 念のためだが、『宋書』では珍と済との血縁関係に触れていない。なお、中国側が大鷓鴣 (オオサザギ) の大王名の音から一字をとって仁徳を讃としたという説もあるが、履中の父であり、前代の倭王である仁徳が南朝に遣使したとすれば、『晋書』の次の記録が関係あるのかもしれない。義熙 9 年 (413):「是歳、高句麗、倭国及び西南夷の銅頭大師、並びに方物を献ず。」(本紀 10 安帝)

<sup>4</sup> 477 年の宋への遣使は「倭国遣使献方物。」(『宋書』本紀 10 順帝 昇明元年) とのみ記され、倭王の名が不明であるが、471 年 (辛亥年) にワカタケルが大王位にあった (先述) こと、ワカタケル大王 (雄略) = 武であった可能性は高いことなどから、477 年の遣使も武によるのであろう。ただし、ワカタケル = 武の定説にも、最近疑問が呈せられている [河内 2018]。

## 参考文献

- 植野浩三 2008 「古市・百舌鳥古墳群出土の須恵器」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』奈良大学文学部文化財学科。
- 大阪市文化財協会 1992 『難波宮址の研究』第九。
- 大阪府教育委員会 1978 『陶邑』Ⅲ。
- 大阪府教育委員会 1981 『允恭陵古墳外堤の調査』。
- 大阪府教育委員会 1994 『堂山古墳群』本文編。
- 大阪府立狭山池博物館 2019 『樹木年輪と古代の気候変動』(特別展図録)。
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号。
- 河内春人 2018 『倭の五王』中公新書。
- 小浜成 2006 「須恵器からみた埴輪・古墳の年代」『年代のものさし 陶邑の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館(企画展図録)。
- 堺市教育委員会 1978 『ニサンザイ古墳一重堀及び二重堀範囲確認調査概要』。
- 堺市教育委員会 2018 『百舌鳥古墳群の調査11 ニサンザイ古墳発掘調査報告書』。
- 白石太郎 1985 「年代決定論(二) 弥生時代以後の年代決定」『岩波講座 日本考古学』1
- 清喜裕二・加藤一郎 2019 「平成29年度 墳丘外表面調査の成果報告 - 宇和奈辺陵墓参考地 -」『書陵部紀要』第70号、宮内庁。
- 積山洋 1990 「古墳時代中期の大型倉庫群 - 難波のクラと紀伊のクラをめぐる一試論 -」『大阪の歴史』第30号、大阪市史編纂所。
- 積山洋 2018 「難波京と難波大道・大津道」『都城制研究』(12)、奈良女子大学古代学術研究センター。
- 十河良和 2012 「河内」『古墳時代の考古学』2、同成社。
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店。
- 都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号、日本考古学会。
- 徳田誠志・清喜裕二 2001 「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号。
- 永井正浩 2018 「埴輪」『百舌鳥古墳群の調査 寺山南山古墳(TYM-5)発掘調査報告書』堺市教育委員会。
- 中村浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ、大阪府教育委員会。
- 埴輪検討会 2003 『埴輪論叢』第4号。
- 光谷拓実 2007 「年輪年代法と歴史学研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集。
- 光谷拓実・次山淳 1999 「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」『奈良文化財研究所 年報』1999- I。
- 南秀雄 1992 「5世紀の建物群の検討」[大文協1992]所収。
- 南秀雄 2014 「難波宮下層遺跡をめぐる諸問題」『難波宮と都城制』吉川弘文館。

## 挿図出典

- 図1・2：大文協1992
- 図3・5：大阪府教委1978
- 図4：清喜・加藤2019
- 図6：大阪府教委1994
- 図7：徳田・清喜2001
- 図8：堺市教委1978・2019
- 図9：大阪狭山池博2019(再トレース)